

---

# 首袋《くびぶくろ》

芹沢 忍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
くひがくろ  
首袋

【Nコード】  
N53590

【作者名】  
芹沢 忍

【あらすじ】  
帰省した際に久々に訪れた川中島古戦場で聴いたガイドさんの話を聴いて思ったことです。小説ではなくエッセイです。

しとしと雨が降り注ぐ古の戦場。<sup>いにしえいくさば</sup>戦国時代で最も多くの血をその地に受けたともいわれる場所である。激しい戦により三日三晩血に染まったため赤川との異名もついた千曲川と犀川の間に囲われるようにしてある地は、そのまま川中島と呼ばれている。小学校から高校を卒業するまで私が過ごした地域でもある。

古戦場ということで薄ら寒い思いを抱く人もいるだろうが、博物館があり公園としても気軽に遊びに行ける場所として地元では親しまれている。現在はすぐ近くに長野インターチェンジや冬季オリンピックで作られたホワイティング、釜めしで有名なおぎのやの店舗があり、大きな合戦が有ったなどとはあまり思えない。地名で連想出来るように、平らな開けた地域である。

帰省して久々にそこにある博物館を訪れたくなり、高校時代の学友に無理を言って足を運んだ。都合良く雨も降り、鬱蒼とした感じは何処となく重い。しかし、昔から馴染みがある我々は、全く神妙にもならず、身近過ぎて全く寄り付かないよね、などと話しながら、有名な武田信玄と上杉謙信の像や首塚、八幡社や執念の石などを呑気に見て歩いていた。そんな所に、いきなり見ず知らずの年配の男性が声を掛けて来た。

「その人、ちよつと時間あったら話し聞いてかない？」

法被にインカム、拡声器。どうやらガイド・ボランティアのようだ。別に博物館に急いで移動することもないので、友人に問うて話を聞いて行くことにする。バスツアーの人もちらほらやってきて十人程の小さな集まりになった。

地形の説明から有名な啄木鳥戦法、伝えられている霧での混乱など、を身振り手振りを交えて語ってくれた。その中で気になったのがタイトルに付けた首袋という言葉である。

「武士は懐に首袋<sup>ふくしほ</sup>について、首を入れる袋を持っていて、取った首

をその袋に入れて、腰に下げたんだよ。首つて言っても一つ六キロもあって、欲を出して六も七も下げてたら動けないでしょ。そこを敵がズバ　　と首を切るわけだ。欲を出し過ぎるのも良くないもんだね」

首は報償を決める上での判断材用として使われた。敵の何と言う輩か、武将と面識のあった人物が首実検を行い、首を取った人物の手柄を判断したのだ。当然、首級を多く持ち帰れば報償は上がる。有名な武将であれば手柄も大きい。首の数を誇る者もあったため、多数を持ち歩く者もあった訳だ。

私は話を聴きながら、遠い景色を思い描いた。

夜の明けきらぬ早朝。川面から沸き立つ濃厚な白い霧。漂い流れるそれは中州を覆い、踏み込んだならば一寸先も見えない程だ。静まり返った中で夜明けを待つ。日が昇るが霧はまだその地を揺蕩う。日が天空に向かうにつれ、霧はベールを脱ぐように薄まって行く。代わりに見えてくるのは布陣する敵の姿だ。鬨の声が響き渡り、中州は混乱に満たされる。戦場の異常な高揚感と立ち昇ってくる汗と血の臭い。

手柄を求めて大物を目指し敵陣へ切り込む武士達は、死ぬ事を恐れていたのだろうか。

討ち取った敵の首を落とし袋に入れ腰に結ぶ。その間は命の危機に曝されるだろう。それでも彼らは首級を持ち闘うのだ。複数の袋を提げた武士が修羅場を駆けける。

現実に戻り声の元に視線を向けると首塚があった。敵に塩を送るという故事が生まれるきっかけとなった武田の作った首塚の一つだ。ふと先程のガイドの言葉が蘇る。首の無い武士が彷徨う姿を見た気がした。腰には複数の袋が下がるが、己の首はそこには無い。自分の首を手にしたら、武士はどうするのだろうか。私には手柄を報告に行くように思えてならなかった。欲とはそういうものだろう。

浮かんでいる幻想は、<sup>まぼろし</sup>塚の前を手探りするように歩き回る。欲望を満たそうとするのだろうか。鎧姿は憐れと言うよりも滑稽かもしれない

いと思う。

欲というものは尽きないものだ。人の持つ特権であり害悪でもある。死しても尽きぬその欲に忠実に行動して彷徨う幻想に私は思わずため息を吐きたくなった。それは自分に対してのため息でもあった。何故ならば、話しを聴きながらこれは良いネタになると思っていたからだった。現にこうして文章に起こしているのだから、人の欲とは恐ろしいものである。

（後書き）

自分で書いてて「ちょっと危ない人？」とか思いました（^| ^;）  
いやあ、だって、話を聴いてたらリアルに浮かんじったんです  
もの。書くしかないでしょう！ と、欲望に忠実になってみました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5359o/>

---

首袋《くびぶくろ》

2010年10月27日03時20分発行